

選考委員賞

熊野古道を歩いて感じたこと

青山中学校 鈴木 水彩

去年の夏、父にさそわれて熊野古道を歩きました。熊野古道とは和歌山県にある熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の三社を結ぶ参詣道のことです。隣接する三重県と奈良県、さらに大阪府にまたがり、参詣道であると同時に生活道として地元住民の手によって今日まで大切に守られてきました。その歴史は平安時代にまでさかのぼり、京都から貴族たちが盛んに熊野三山を詣でたと言われています。けれども紀伊半島の大部分には紀伊山地が広がっているため、参詣には険しい山道か海沿いの道を時間をかけて歩くしかありませんでした。

私が歩いたのは伊勢の松阪と和歌山県新宮市の熊野速玉大社を結ぶ「伊勢路」の一区間で、「馬越峠」という場所です。私はこれまでに山歩きの経験はほとんどなく、どちらかというと運動はあまり好きではないので、峠と聞いてとても心配になりました。この時は三重県の知人が同行してくれることになっており、せっかくの良い機会だからと登ることになりました。三重県尾鷲市の中心部から少し北に行った所にこの峠はあります。中世のままの石畳道が残る

ことから二〇〇四年に世界遺産に登録されました。馬越峠は約六・五キロあり、約三時間ほどの道程です。

国道に近い古道の入り口は、比較的ゆるやかで、道幅も広がったです。ところが、段々と道は狭く急になっていきます。そして、樹木がうつそうと生い茂り、辺りは薄暗くなってきました。道を歩くと言うよりも、木々の間を通り抜けているようです。山側にも谷側にもヒノキの林が続き、まっすぐと伸びた幹がまるでかべのように感じられました。

古くからの姿をなるべく変えずに残そうとする地域の人々の考えから、必要最小限の整備が行われているのみで、手すりも無いため、場所によってはとても怖くて、もう戻りたいと思いました。諦めずに歩き続けているうちに昔の旅人はどれほど大変であったろうという思いが浮びました。太陽の光があまり届かない地面は湿気が多く、たくさんのコケが茂っています。急な山道を登るのに大切な石畳も、コケにおおわれて滑りやすくなっている箇所もありました。昔は草履やわらじで旅をしていたので、とても歩きづらかったのではないかと感じました。

「足もとに生えている草にもよく見ると色々な種類があるんだよ。」と父の知人が声をかけてくれました。気をつけて見てみると、似ているようで少しずつ違うことが分かりました。それらは全てシダ植物の仲間であると教えてもらいました。背の高い樹木に光がさえぎられてしまう地面近くでは、わずかな日光をわけあえるように、お互いが他の葉を邪魔せず、重なり合わないように生えているのです。

自然の不思議な力にはおどろかされました。

途中、辛い箇所もありましたが、通り抜ける風の心地良さは忘れることができません。私達が訪れたのは八月でしたが、森の中はひんやりとしていました。頂上近くで小さな滝のようになっていた場所があり、その付近はとても涼しい空気に包まれていました。水に手をつけてみると本当に冷たく、その澄んだ流れを見ていると心が穏やかな気持ちになりました。この水は、山に降った雨水が地層を通り抜けて湧き出ているのだと思うと、なんだかありがたい気持ちになりました。

自然界では様々な生物が影響を与え合って生態系を守っています。人間だけが自分勝手に環境をこわすことは許されないと思います。古来、人間が森に守られてきたように、人間も森のために空気や水を汚さない努力が必要です。馬越峠を歩く中で感じた自然の力を思い返し、生活の中で出来ることから気をつけていきたいと思っています。